
屁ひり嫁

一言 真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屁ひり嫁

【Nコード】

N5837J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

実際に地方にある民話を小説にしたもの。

ある百姓の家に、小夜という若くて美しい娘が嫁いできた。働き者で器量の良い娘だが、一つだけある悩みを抱えていて――？

狭い座敷に、ぼつりと、白紙の張られた籠が置かれ、その中で、小さな炎が舞っていた。真つ暗な座敷を、その籠の薄桃色の光が、照らしだしている。

そこに、二つの長い影が伸びていた。その影は、二つの布団の上に腰下ろす男女の足から伸びていた。

男女は向かい合っていた。男はじつと目の前にいる花嫁の顔に視線を投げかけ、花嫁はその視線から逃れるように、恥ずかしげにじつと俯いている。

「小夜」

名前を呼ぶその声に、花嫁の肩がかすかに震えた。

「小夜」

もう一度、男がその名前をつぶやいた。すつと、花嫁は細い首を持ち上げて、夫を見つめた。

堀の深い、細長い夫のその顔を見つめ、花嫁の頬が籠の中の炎と同じ色に染まった。

「修司様」

そつつぶやいた花嫁の唇に、夫はそつと指先を伸ばし、そこに塗られた紅を指でなぞった。もう片手で、花嫁の肩を抱き、そつと自分の胸に引きよせた。

「良いだろう？ 小夜」

修司の声に、小夜はかすかにうなずきかけたが、ぴたりとその拳動を止め、首を上げた。小夜の手が、そつと自分の尻にあてられる。

「あの……」

「何だ？」

優しく問いかける修司に、小夜は出そうとした声を寸前のところで飲み干し、なんでもありません、と首を振った。

「良いかな」

もう一度そう訊く修司に、小夜は顔を赤に染めて、ゆっくりとなずいた。

しかし、小夜はもじもじと、恥じらいの表情を浮かべたまま、なかなか自らの足を開こうとしなかった。

修司は、男と過ごすのは今夜が初めての小夜に、そつと氣遣うように優しく声をかけて諭し、やつのことで足を開かせた。

それから修司は、小夜を優しく抱いた。小夜は、行為の間、ことあるごとに自分の尻をかばうように手を置き、それを修司は処女の小夜が初めての行為に痛みを感じているのだと思い、さらに優しく抱いた。

終わった後、二人は布団に裸のまま入り、寄り添った。と、そこでもまた小夜が恥じらうように体を揺り動かしながら、何事かを言おうと口を開きかけた。

「何だ？」

修司は、そつと小夜の長い髪を掬い、彼女の美しい顔をあらわにしながら、そう尋ねた。しかし、小夜は再び黙り込んでしまい、修司はそんな恥ずかしがり屋の小夜を愛しく思い、腕で彼女の首を包み、手で彼女の頭をさすった。

初夜を過ぎ、翌朝が来ると、小夜はよく働き出した。姑の辛辣な小言には、眉ひとつ曲げずに堪え、せつせと働き続けた。

修司は、小夜の働きぶりを誇りに思い、座敷に座ったままそれを眺めていた。しかしふと、小夜の顔色がよくないことに気付き、小夜を呼び止めた。

「小夜。顔色が悪いぞ。どうした？」

修司は心配そうに、廊下に立つ小夜に近づき、小夜の顔を覗き込んだ。すると、小夜は顔をかあつとまた赤くして、顔をそむけてしまふ。修司は、小夜の手がその小ぶりの尻に添えられているのを見て、ははあ、と笑った。

初夜を迎えて、小夜はまだ秘部が痛み、それで顔色もよくないの

だろつと踏んだ修司は、小夜の肩を叩き、

「誰にでもあることだ。気にするな、すぐに治る」

修司がそう言つと、小夜は何か言いたげに修司の顔を見たが、黙つてうなずき、そそそ、とまた仕事に戻つていった。

しかし、翌日になつても、小夜の顔色はよくなることはなかった。それどころが、日ごとに悪くなつていき、その細い体は病にかかったようにやせ細つていった。

修司は血相を変えて、座敷の上で小夜と向かい合い、口を開いた。

「どうしたんだ、小夜。具合が悪いのか？」

そう訊いても、小夜は白い顔を黙つて俯かせるばかり。

「母さんの小言を辛苦に感じているのか？」

そう訊いてみても、小夜は言葉もなく首を振つた。しかし、ぼつりと、私は、とつぶやいた。

「何だ、小夜」

修司は立ち上がった、小夜の肩に手をかけながらそう訊いた。すると、小夜は顔を上げ、

「私には、生まれてこの方、苦にし続けてきた一つの悩みがあるのです」

「悩み？」

「へ、です」

「へ？」

修司は一瞬何のことか解からず、小夜の顔をまじまじと見つめた。

「屁が止まらない、という癖です」

修司は呆氣にとられた様子で小夜を見つめた。

「嫁ぐ際に、実家の母に、お前のその癖はなんとも恥ずかしい、屁などこらえてしまえ、と叱られました。それから私は今日までずっと屁をこらえてきましたが、もう——！」

そう言つて、小夜は正座していた腰をぱつと持ち上げて、苦しそうに顔をゆがませながら尻に手を置いた。

修司は、思わず吹き出し、

「なんだ、そんなことか。屁ぐらいしてしまえ。我慢し続けて、体を悪くしてもよくない。さあ、さっさとしてしまえ」

すると、小夜は安堵の表情を浮かべて、何度もうなずき、

「はい。ではごめんなさい」

小夜は両手を尻にかけるなり、衣をまくって、その小さな尻を現した。そして、ふんぬ、とその美しい顔を渋柿のように歪ませた。その途端――。

轟音が屋敷を襲った。大風が吹き、地響きが起こり、小夜の尻の射程範囲に偶然立っていた姑は、あつという間に吹っ飛ばされた。姑の体が宙を舞う。あーれー、と叫ぶ姑の声は、屋敷の前の畑を次々と越え、遠ざかり、林のところまで来てようやく、姑は近くにあった木の枝につかまり、吹き飛ばされることを免れた。

修司はぽかんと、大口を開けたまま、庭に吹き飛んだ襖や、黄色く屁の色に色塗られた障子の残骸などを見つめた。そのうち、髪を振り乱した姑がかんかんに鳴って帰って来た。

姑は庭を越えて、縁側のところで足を止めると、尻を自分の方へ向けたままの嫁を睨みつけ、

「お前見たいな不埒な女を、この家に置けるか！ とつとと出ていけ！」

そう言つて、啞然と尻を出したまま固まっている嫁に近づくと、ペチン、と思い切り尻を引っぱいた。

それから、修司はなんとか姑の怒りを鎮めて、小夜を家に置くことを頼んだが、姑はかたくなに首を振った。生まれてこの方、姑の言い付けを誠実に守ってきた修司は、母親の意向に背くことはできず、結局引きさがってしまった。小夜は、実家に送り返されることになった。

後日、修司は頑丈に作られた駕籠を用意し、小夜をそれに乗せ、家を後にした。

駕籠は二人の従者が前後を持ち、修司は小夜の傍らに付き添って歩いた。

修司は、小夜の細い手を握って、切ない表情で、しきりに「悪いなあ、悪いなあ」とつぶやき続けている。その目に薄く涙があふれているのを見て、小夜はにこりと微笑み、

「良いのです。あなたと暮らしたわずかな間が、私にとって最高のものであり、それだけで私は報われているのです」

と修司の手を優しく包み込む。

そのまま悶々と歩いていると、ふと修司は自分の喉がからからに乾いていることに気づいた。最近は日照り続きで、水を欲しても、湧水はどこにもない有様である。

しかしふと、修司の目が、道端に立つ一本の柿木に向けられた。そこに実っている、赤々とよく熟した柿の実に、修司の眼は吸いつけられた。

「あの柿、食いたいな……」

実を取りたくても、その木の背丈は異常なほどに長く、修司は木を見上げながら涎を垂らすしかなかった。しかし――。

「修司様」

ふと小夜が、駕籠の中から頭を出して、木を見上げていた。

「せめてもの恩返しです」

そう言つと、小夜は駕籠から降り立ち、木に自分の背中を向けた。そして、腰を曲げて衣をまくり、またあの白い尻を空気に晒した。

「小夜――!!」

修司の顔が真っ赤になり、二人の従者が食い入るように小夜の美尻を見つめる中、小夜は、はッ、と大きな掛け声と共に、足を踏ん張った。

小夜の尻から大風が吹き、修司たちの髪の毛が大きく逆立った。柿木が大きくしなったかと思うと、ぼろぼろと枝から柿の実がはがれ落ち、見る間に地面をたくさん柿の実が覆い尽くした。

唖然としていた修司だったが、ふと我に返って、柿の木に近づき、一つ、実を拾った。それにがぶりとかぶりつき、

「うまい！ うまいぞ！」

目を丸くして、それからというものの、修司は二人の従者を交えて、がぶりがぶりと柿の実にかぶりついた。

その様子を、小夜は傍から見つめていて、幸せそうに笑っていた。修司はその視線に気づいて振り向き、「小夜も食うか」と一つの柿を投げてよこした。

その時、修司は小夜の顔を見つめて、ふとまた切ない気持が込み上げてきた。そして、くわえていた柿を投げ捨てると、決心したように小夜を見据え、

「やはり、小夜を家に置いておこう。なんとか母さんを説得する」
そう言うなり、小夜に駕籠に乗るよう促し、柿を食うのに夢中な従者二人を叱咤して再び駕籠を担がせ、来た道を引き返した。

修司は家に帰ると、姑に小夜を家に置くことを頼んだ。もし、姑が反対しても、引きさがらないことを修司は固く決心していた。しかし、姑は、意外にも小夜をたかが屁のことなどで送り返したことを悔いていて、修司の申し出に頷いた。

それからというものの、三人は仲良く暮らし始めた。時折、屋敷から轟音と共に大風が吹き、辺りに異様な匂いが漂うことが、村中で評判になっていた。

（後書き）

これは、実際にある民話を小説にしたものです。
参考文献 甲斐の民話 土橋里木編 未来社

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5837j/>

屁ひり嫁

2011年10月5日02時38分発行